〈特集「受動表現」〉

スペイン語

高垣 敏博

はじめに

スペイン語の受身文にはつぎの３つのタイプがある．まず，英語の受身文に相当する，いわゆるコピュラ（繋辞）動詞 “ser”と過去分詞を組み合わせる(1a)である．これは“ser”受身（あるいは迂言的受身）と呼ばれる．２つ目のタイプは受身の「結果状態」を焦点化する(1b)である．こちらはもう一つのコピュラ動詞“estar”と過去分詞の組み合わせによるもので，“estar”結果構文と呼ぶことにする．さらに，(1c)に見られる再帰構文による受身文がある．主語の人称（主語はモノに限られる）と一致した再帰代名詞(“se”)と主語に応じた動詞形（３人称単数もしくは複数）が組んで受動内容を表現する．これは再帰代名詞が特徴的であるため，“se”受身とも呼ばれる．

(1) a. La puerta fue abierta por el guardián ayer a las ocho. “ser”受身

ドア$_{主}$ “ser”$_{点過去}$ 開ける$_{過分}$ 警備員$_{動主}$ 昨日 8 時に[1]

ドアが昨日 8 時に警備員によって開けられた

b. La puerta está abierta (*por el guardián). “estar”結果構文

ドア$_{主}$ “estar”$_{現}$ 開ける$_{過分}$ 警備員$_{動主}$

ドアが開けられている（警備員によって）

c. Aquí se venden periódicos (*por un vecino). 再帰受身（“se”受身）

ここで “se” 動詞$_{現}$ 新聞$_{主}$ ある隣人$_{動主}$

ここで新聞が売られている（ある隣人によって）

３つの受身は概ねつぎのような特徴をもつ．

① 受身主語は，(1a)(1b)のコピュラ動詞を用いる受身では，人・モノの両方が可能であるが，(1c)の再帰受身ではモノ主語のみが許容され，人は主語として立てないという制限がある．

② 動作主句については，(1a)の“ser”受身では「前置詞 por + 名詞句」を伴うことがで

[1] 略号は，主＝主格，対＝対格(直接目的語)，与＝与格(間接目的語)，動主＝動作主，現＝現在，点過＝点過去，線過＝線過去，現完＝現在完了，過分＝過去分詞．

きるが，(1b)の“estar”結果構文および(1c)の再帰受身では一般的に動作主句が共起することはない．[2]

③ 時制については，後述のように，“ser”受身が完了時制を基本とするのに対し，再帰受身にはこのような時制上の制限はなく，どの時制においても自然な発話となる．

ところで，スペイン語では一般的な傾向として受身文に比べ，能動文が圧倒的に優勢であるといわれる．[3] 英語などと比べても，(1a)のようなコピュラ動詞による受動構文の使用率が低いという確かな直感がある．[4] なお，スペイン語の２種のコピュラ動詞は，一般に“ser”が主語と述語の「恒常的な関係」を表すのに対し，“estar”は主語の「一時的状態」を表すという説明がなされる．一方，動詞の語彙アスペクトの観点から見ると，前者が未完了性（atelic：非限界），また，後者が完了性（telic：限界）をもつといってよいだろう．

アンケートの受身構文

以下が各アンケート項目についてのスペイン語における状況である．

(7) 「A は B に叩かれた」（直接受身）

この日本語文はスペイン語では(2)に相当する．これに対応する能動文は(3)である．

(2) Pedro fue golpeado por Juan.

ペドロ$_{主}$ “ser”$_{点過}$ 叩く$_{過分}$ フアン$_{動主}$

ペドロはフアンに叩かれた

(3) Juan golpeó a Pedro.[5]

フアン$_{主}$ 叩く$_{点過}$ ペドロ$_{対}$

フアンはペドロを叩いた

Juan が golpear「叩く」という他動詞の動作主(Agent)で，Pedro はその対象(Theme, Patient)である．“fue”は動詞“ser”の「点過去」形である．これは過去の出来事を一つのまとまった完了事象と捉える過去時制で，「完了過去」と呼ぶこともできる．(2)や上の(1a)の受身タイプは，一般的に完了した行為を表すのに多用される．[6]

---

[2] 動作主を伴う事例については，高垣 2004，2005 を参照．

[3]「スペイン語は能動構文を明瞭に好む傾向がある」（“el idioma español tiene marcada preferencia por la construcción activa”, Gili Gaya 1973:122).

[4] De Miguel 1992:205. また，“ser”受身よりも，再帰受身が多用される傾向については，Takagaki 2005 を参照．

[5] ここで前置詞 a は，人の直接目的語を標示する機能をもつ．

[6] 点過去と同じく完了事態を表す現在完了も同じように用いられる．

反対に，未完了時制である(4a)の現在（“es golpeado”）や(5a)の「線過去」（“era golpeado”; 線過去は過去事象を継続相として捉える時制で，未完了過去とも呼ばれる）では“ser”受身が難しくなる．

(4) a. #Pedro es golpeado por Juan.

ペドロ$_{主}$ “ser”$_{現}$ 叩く$_{過分}$ フアン$_{動主}$
ペドロはフアンに叩かれる

b. Juan golpea a Pedro.

フアン$_{主}$ 叩く$_{現}$ ペドロ$_{対}$
フアンはペドロを叩く

(5) a. #Pedro era golpeado por Juan.

ペドロ$_{主}$ “ser”$_{線過}$ 叩く$_{過分}$ フアン$_{動主}$
ペドロはフアンに叩かれていた

b. Juan golpeaba a Pedro.

フアン$_{主}$ 叩く$_{線過}$ ペドロ$_{対}$
フアンはペドロを叩いていた

ただし，別の意味では用いられる（文頭の#で示す）．すなわち，これらの例では，「習慣」などの反復行為を表す場合には可能な受身文となる．(4a)や(5a)はそれぞれ「A はいつも B に叩かれている（現在）」，「A はいつも B に叩かれていた（未完了過去）」の解釈であれば使用可能というわけである．[7] また，これに対応する能動文(4b)(5b)も同じく習慣的意味をもつ．

(イ) 「A は B に足を踏まれた」（持ち主の受身，体の部分）

スペイン語では，このタイプの受身文はまったく成り立たない．したがって能動文

(i)a. Pedro *ha sido golpeado* por Juan. ペドロはフアンに叩かれた ［受動文］

ペドロ$_{主}$ “ser”$_{現完}$ 叩く$_{過分}$ フアン$_{動主}$

b. Juan *ha golpeado* a Pedro. フアンはペドロを叩いた ［能動文］

フアン$_{主}$ 叩く$_{現完}$ ペドロ$_{対}$

[7] ただし，過去分詞になる他動詞自体が未完了性（非限界性）をもつ状態動詞については，未完了時制で用いられるのが普通である．以下の項(ケ)を参照．

(i)a. A era [es] amado por todos. A はみんなに愛されていた［いる］

A $_{主}$ “ser”$_{線過[現]}$ 愛する$_{過分}$ みんな$_{動主}$

b. Todos amaban [aman] a A. みんなは A を愛していた［いる］

みんな$_{主}$ 愛する$_{線過(現)}$ A $_{対}$

で表現するしかない.

(6) *(Yo) fui pisado el pie en el metro.[8]

(私$_{主}$) "ser"$_{点過}$ 踏む$_{過分}$ 足 地下鉄で

私は地下鉄で足を踏まれた

(7) Me pisaron el pie en el metro.[9]

私$_{与}$ 踏む$_{点過}$ 足$_{対}$ 地下鉄で

私は足を地下鉄で踏まれた

(6)は"ser"受身文であるが，非文となっている．そこで代替できるのは能動文(7)ということになる．これは「不定人称文(非人称文)」の一種で，動詞が３人称複数形をとり，主語が明示されないという特徴をもつ(英語の They ... による不定人称文に相当する).

(ウ) 「A は B に財布を盗まれた」(持ち主の受身，持ち物)

「与える」(dar)や「プレゼントする」(regalar)，「書く」(escribir)，それにここで問題になる，「盗む」(robar)のように与奪を表すいわゆる授与動詞（直接目的語・間接目的語の両方を動詞の項としてもつ）を用いる受身文で，(8)の能動文が基本になる.

(8) El ladrón me ha robado el bolso.

泥棒$_{主}$ 私$_{与}$ 盗む$_{現完}$ バッグ$_{対}$

泥棒が私からバッグを盗んだ

この文の主語は el ladrón 「泥棒」，"me"は間接目的語（「私に，私から」)，el bolso「バッグ」は直接目的語である．このようなタイプの文を受身にする場合には，直接目的語を受身主語にする場合と間接目的語を受身主語にする場合が考えられるが，スペイン語では，間接目的語を主語化できないという制限がある．したがって，直接目的語を受身主語とする(9a)のみが可能となる．[10] これに対し，間接目的語を主語化する(9b)は非文となる.

---

[8] スペイン語では(6)のように主語を省略できる．以下 ( )内は主語の省略を表わす.

[9] 完了事態を表す点過去であるが，現在完了を用いても議論は同じことになる.

(i)*(Yo) he sido pisado el pie en el metro.

私$_{主}$ "ser"$_{現完}$ 踏む$_{過分}$ 足 地下鉄で

(ii) Me han pisado el pie en el metro.

私$_{与}$ 踏む$_{現完}$ 足$_{対}$ 地下鉄で

[10] このような受身も文法的には問題ないが，現実にはあまり用いられないとの判断（Raquel Rubio 氏）もある.

(9) a. Me ha sido robado el bolso por el ladrón.

私$_{与}$ “ser”$_{現完}$ 盗む$_{過分}$ バッグ$_{主}$ 泥棒$_{動主}$

バッグは泥棒により私から盗まれた

b. *(Yo) he sido robado el bolso por el ladrón.

（私$_{主}$） “ser”$_{現完}$ 盗む$_{過分}$ バッグ$_{対}$ 泥棒$_{動主}$

私はバッグを泥棒に盗まれた

興津 1972:144-5 によると，dar「与える」以外にも，decir「言う」，mandar「命ずる」，permitir「許す」のような間接目的語をとる動詞は，それ（一般に人）を主語として受身文をつくることができないという．実際，(10)はどれも間接目的語（「私」や「彼」）を主語化できない．

(10)	a. 言われた	I was told...	>	*Yo fui dicho...
	b. 与えられた	He was given a book.	>	*Él fue dado...
	c. 許された	He was permitted to go.	>	*Él fue permitido...

このうち，“decir”「言う」の受身文については後ほど(コ)で扱う．

(エ) 「昨日の夜，私は赤ん坊に泣かれた．それでちっとも眠れなかった」（自動詞からの間接受身）

そもそもスペイン語では自動詞の“ser”受身はありえないので，「私は赤ん坊に泣かれた」をそのままスペイン語に置き換えた文(11)はまったく非文となる．

(11) *(Yo) fui llorado por el bebé anoche.

(私$_{主}$)“ser”$_{点過}$ 泣く$_{過分}$ 赤ん坊$_{動主}$ 昨夜

夕べ私は赤ん坊に泣かれた

これに代替するスペイン語の可能な表現としては，(12)のように，“llorar”「泣く」をそのまま能動形式にしておいて，利害関係（この場合「泣かれて困った」という被害）の被影響者（被害者）である「私」を人称代名詞の間接目的語“me”（「私に対して，私の困ったことに」）にして動詞に添える方法しかないだろう．主語の赤ん坊 “el bebé” は「私に対して（私の困ったことに）」「泣いた」，という構成にするわけである．

(12) *Anoche me lloró el bebé*, y apenas pude dormir.

夕べ 私$_{与}$ 泣く$_{点過}$ 赤ん坊$_{主}$ そして ない できる$_{点過}$ 眠る

夕べ私は赤ん坊に泣かれて，ほとんど眠れなかった

これに似た日本語の「間接受身」（あるいは，「迷惑受身」「被害受身」）の例として，(13a)がよく引用されるだろう．対応するスペイン語は能動文の(13b)である．

(13) a.私は雨に降られた.

b. Me llovió.

私$_{与}$(雨が)降る$_{点過}$

私は雨に降られた

被害をこうむる当事者は間接目的語代名詞(“me”)で表わされる．ところが，ここで日本語とスペイン語では微妙な意味の差がある．すなわち，スペイン語では被影響者が「雨に濡れる場合しか表わせないのに対して，日本語の『降られる』は，雨天のために計画の変更を余儀なくされるといった，ごく間接的な影響も」表わすという（福嶌 1990:207-8）．すなわち，スペイン語においては，「影響」がより直接的でなければならないのである．[11]

さらに，このような間接目的語が表す被影響者を取り込む「間接影響文」の類型として，スペイン語では(14)のような再帰構文が多用される．

(14) a. Se le murió la mujer.

“se” 彼$_{与}$ 死ぬ$_{点過}$ 妻$_{主}$

彼は妻に死なれた

b. Se le rompieron los platos.

“se” 彼女$_{与}$ 割る$_{点過}$ 皿$_{主}$

彼女は皿に割れられた

(14a)の“morir”「死ぬ」は自動詞で完了的意味を付加する再帰代名詞“se”を伴って「死んでしまう」の意味になる．(14b)の他動詞“romper”「こわす」は，再帰代名詞“se”を伴って自動詞化する(“romperse”「こわれる」)．それぞれ再帰代名詞と動詞の間に,間接目的語代名詞(“le”「彼に，彼女に」)を挿入することにより，その人に影響（迷惑）が及ぶ(「妻・彼女」には気の毒なことに）というパタンができるのである．[12] ここで，スペイン語では，(14a, b)から，受身主語は人（妻）でもモノ（皿）でもかまわないが，

[11] さらに(ｴ)や(12)の「泣く」(llorar)の例についても，「日本語では『隣室で子供に泣かれて仕事ができなかった』のような言い方が可能であるのに対して，スペイン語の『llorar（泣く）+与格の語』は，『泣きつかれる，すがりつかれる』というような直接的な状況を述べるのを専らとする」と報告されている（福嶌 1990:208）．

[12] 福嶌 1983, 1984, 福嶌 1990, Takagaki 2009 を参照．

日本語では人に限られるという制限がある．日本語訳の「*皿に割れられた」は非文である．さらにはつぎのような例文が挙げられる．

(15) a.?電車のドアに突然あかれて，外に落ちそうになった．
b.*シールに剥がれられた．[13]

(オ) 「新しいビルが（A によって）建てられた」（モノ主語受身，1 回的）

このタイプの受身文はスペイン語でも，動作主である「A によって」の有無にかかわらず直接受身文として，問題なくつくることができる．

(16) En este barrio fue construido un nuevo edificio por la constructora.
この地区で "ser"$_{点過}$ 建てる$_{過分}$ 新築の家$_{主}$ 建築業者$_{動主}$
新しいビルがその建築業者によってこの地区に建てられた

動作主の"por la constuctora"「建築業者によって」を省略することもできる．また受身主語がモノであることから，(17a)のような再帰受身も可能になる．

(17) a. En este barrio se construyó un nuevo edificio.
この地区で "se" 建てる$_{点過}$ 新築の家$_{主}$
この地区に新しいビルが建てられた．

b. *En este barrio se construyó un nuevo edificio *por la constructora.*
この地区に "se" 建てる$_{点過}$ 新築の家$_{主}$ 建築業者$_{動主}$
この地区に新しいビルがその建築業者によって建てられた

ただし，(1c)のところで述べたように，再帰受身の制約として動作主句を明示できないので，(17b)は非文法的となる．

(カ) 「カナダではフランス語が話されている」（モノ主語受身，恒常的．動作主が明示されない）

(オ)のタイプに対し，モノ主語で恒常的事態を表す受身がこのタイプである．これまで見たように，スペイン語では"ser"受身と再帰受身の２つの可能性が考えられる．前者については，この文が完了事態でないことがまず問題となる．現在時制で反復行為（「習慣」）を表わす動詞が用いられるのであれば可能ではある（例えば，(4a)の"es golpeado"「いつも（繰り返し）叩かれている」）が，ここで用いられている動詞"hablar"

[13] (14)(15)ともに福嶌 1990:208 より．

「話す」は「活動」(activity, または「過程」process)[14]を表わす継続動詞であるため，繰り返し行為を表せない．そのため，のぞまれるような受身(18a)は作れないことになる．

(18) a. *En Canadá el francés es hablado.

カナダで　フランス語$_{主}$ “ser”$_{現}$ 話す$_{過分}$

カナダではフランス語が話されている

b. En Canadá se habla el francés.

カナダで　“se” 話す$_{現}$ フランス語$_{主}$

カナダではフランス語が話されている

可能性としては，このような時制上の制約がない再帰受身ということになる．結局，(カ)に対応するスペイン語受身は(18b)である．

(キ)　「財布が（A に）盗まれた」（モノ主語受身，モノ主語の背景に被影響者が想定）

これは(ウ)との関連で考えることになる．(9a)を改めて見てみよう．

(9) a. Me ha sido robado el bolso por el ladrón.

私$_{与}$ “ser”$_{現完}$ 盗む$_{過分}$ バッグ$_{主}$　泥棒$_{動主}$

バッグは泥棒により私から盗まれた

ここで，(9a)の間接目的語代名詞(“me”)が明示されない場合を考えればよいであろう．“me”を削除した (19)が(キ)に相当するが，背景には当然“me”のような被影響者が想定されるだろう．

(19) Ha sido robado el bolso (por el ladrón).

“ser”$_{現完}$ 盗む$_{過分}$ バッグ$_{主}$　泥棒$_{動主}$

バッグは(泥棒により)盗まれた

動作主“por el ladrón”「泥棒に」を省略すると(キ)に対応するスペイン語受身文となる．

(ク)　「壁に絵が掛けられている」（モノ主語受身. 結果状態の叙述）

(20)のスペイン語受身文と(21)の日本語例には平行性が認められる．

(20) a. El juguete está roto.

おもちゃ$_{主}$ “estar”$_{現}$ こわす$_{過分}$

おもちゃはこわされている

---

[14] Vendler 1976 を参照.

b. El cuadro está puesto en la pared.

その絵$_{主}$ “estar”$_{現}$ 掛ける$_{過分}$ 壁に

その絵は壁に掛けられている

(21) a. そのおもちゃはこわされている.

b. その絵は壁にかけられている.

スペイン語の“estar”結果構文は，冒頭(1b)のところで述べたように，「動作の結果状態を表わす」一種の受身構文である. (20a)で用いられている動詞“romper”「こわす」(“roto”はその過去分詞)は状態変化を引き起こし，(20b)の動詞“poner”「掛ける」（“puesto”はその過去分詞）は対象物の位置変化を含意し，ともに限界性アスペクトをもつ達成動詞であると考える. [15]

一方，日本語の(21)の例では受身文に「テイル」が付加されて，継続相と結果相の両方の解釈がなされる. [16] その結果，スペイン語の“estar”結果構文と日本語のテイル受身の解釈の一つには，他動詞の働きかけを被った対象の結果状態を表わすという共通性が生まれる．そこで，文例(ク)に対応するスペイン語文は(20b)ということになる.

さらに, (22)(23)のような非文にもスペイン語と日本語で平行性が見られることに注目してみよう. [17]

(22) a.*El español está hablado.（継続動詞ゆえに不成立）

スペイン語$_{主}$ “estar”$_{現}$ 話す$_{過分}$

スペイン語が話されている

b. *El coche está conducido.（継続動詞ゆえに不成立）

車$_{主}$ “estar”$_{現}$ 運転する$_{過分}$

車は運転されている

(23) a. #スペイン語が話されている.

（結果状態の解釈は不可だが継続相解釈は可）

b. #その車が運転されている.

（結果状態の解釈は不可だが継続相解釈は可）

(22)で用いられているスペイン語の動詞“hablar”「話す」や“conducir”「運転する」は「活動」動詞で継続相をもつため，“estar”結果構文の条件に合わない（注 14 を参照）.

---

[15] 高垣 2004, 2005 では動詞が「達成動詞」であることがこの構文の条件であると考えている.

[16] 能動文では，継続相しか表わさないが，受動文になると結果相も可能になる（金田一 1950，竹沢 1991）.

[17] 本節の議論や例文は高垣 2000 による.

一方，(23)の日本語文は，行為の進行という意味（継続相）では解釈可能（#で示される）であるが，期待される結果状態解釈は不可能である．全体を比較してみると，(20)(21)のような限界性動詞（達成動詞）では両語において結果状態構文が可能であるが，(22)(23)のような非限界性動詞（活動動詞）の場合は，結果状態が表わせないという共通性が確認できる．

さらには，ある種の自動詞[18]でも両言語において結果状態構文が成り立つことを見ておこう．

(24) a. El abuelo ya está muerto.

祖父$_{主}$ すでに "estar"$_{現}$ 死ぬ$_{過分}$

祖父はもう死んでいる

b. Todos los pétalos están caídos en el suelo.

すべての花びら$_{主}$ "estar"$_{現}$ 落ちる$_{過分}$ 地面に

花びらが全部地面に落ちている

(25) a. 玄関が開いている．

b. 庭の木が倒れている．

ともに非対格自動詞によるが，詳しくみると，つぎの例のように，スペイン語の方がより制限されていることがわかる．移動の自動詞である llegar「着く」, venir「来る」は"estar"結果構文で用いることができない．これに対し，日本語では(26b)のようにまったく問題なくテイル文にすることができる．

(26) a.*Aquellas personas ya estaban llegadas [venidas] de lejos.

あの人たち$_{主}$ すでに "estar"$_{線過}$ 着く[来る]$_{過分}$ 遠くから

あの人たちはすでに遠くから着いていた[来ていた]

b. 一行は着いている[来ている]．

このようなスペイン語の"estar"結果構文の形成条件については，まだ十分解明されているとはいえず課題が残る．[19]

---

[18] morir「死ぬ」, caer「落ちる」や日本語の「開く」,「落ちる」などは非対格自動詞と考える．反対に，非能格自動詞（esturidar「勉強する」, nadar「泳ぐ」）の場合には，

(i)a. *El chico está estudiado [nadado].

男$_{主}$ "estar"$_{現}$ 勉強する[泳ぐ]$_{過分}$

b. #山田さんが勉強している[走っている]

のように結果状態解釈は成り立たない．いうまでもなく(i)b.は継続相解釈では正文である．

[19] 高垣 2004, 2005 を参照．

(ケ) 「A は B に/から愛されている」(感情述語の受身．特に動作主マーカーに注目)

スペイン語でも amar「愛する」, querer「愛する」, odiar「憎む」, respetar「尊敬する」のようなある種の心理動詞や conocer「知る,なじみである」, saber「知る」のような認識を表す状態動詞は"ser"受身において，一般に未完了時制で用いられる．[20]

(27) a. Isabel es querida por todos.

イサベル$_{主}$ "ser"$_{現}$ 愛する$_{過分}$ みんな$_{動主}$

イサベルはみんなに愛されている

b. Fulano es [era] muy conocido en aquella comarca. [21]

某氏$_{主}$ "ser"$_{現[線過]}$ とても 知る$_{過分}$ その地方で

某氏はその地方ではとても知られている[いた]

しかしながら，De Miguel (1992:208)よると，このような場合「総称的動作主が必要になる」という．実際，(28)は個別性の高い動作主 (por Juan) を用いると非文になるが，por todos「みんなに」のような総称的動作主を伴う場合には許容されることがわかる．

(28) a. En su tiempo, era conocido {por todos / *por Juan}.

当時 (彼$_{主}$) "ser"$_{線過}$ 知る$_{過分}$ {みんなに/フアンに}$_{動主}$

当時彼は{みんなに/ フアンに}知られていた

b. Isabel es querida {por todos / *por Juan}.

イサベル$_{主}$"ser"$_{現}$ 愛する$_{過分}$ {みんなに/ フアンに}$_{動主}$

イサベルは{みんなに/ フアンに}愛されている

これらの状態動詞が用いられる"ser"受身文では，動作主がこれまで見たように前置詞 por「～に，～によって」にだけではなく，前置詞 de[22]によっても導かれる．表面的には，日本語のカラとの類似性に思い至る．

(29) a. En su tiempo era conocido *de* todos.

当時 (彼$_{主}$) "ser"$_{線過}$ 知る$_{過分}$ みんなから$_{動主}$

当時彼はみんなから知られていた

---

[20] Gili Gaya 1973 を参照．

[21] Gili Gaya 1973 を参照．

[22] Viajan *de* Osaka a Tokio.「彼らは大阪から東京まで旅行する」, Trabajo *de* ocho a cinco.「私は 8 時から 5 時まで働く」など「起点・出発点」の意味を基本に持っている．

b. Isabel es querida *de* todos.

イサベル$_{主}$"ser"$_{現}$ 愛する$_{過分}$ みんなから$_{動主}$

イサベルはみんなから愛されている

(コ) 「A は B に/から「…」と言われた」(伝達動詞の受身．特に動作主マーカーに注目)

すでに(ウ)のところで述べたように，伝達動詞の decir「言う」やこれに類似すると考えられる mandar「命ずる」(興津 1972:144-5) は間接目的語を主語とする"ser"受身をつくることはできない．

(30) a. *A fue dicho por B que…

A$_{主}$ "ser"$_{点過}$ 言う$_{過分}$ B$_{動主}$ ～ということを$_{主}$

b. ～と言われた I was told that... > *(Yo) fui dicho que...

(私$_{主}$) "ser"$_{点過}$言う$_{過分}$ ～ということ

間接目的語 A を主語化した受身は(30b)のように，スペイン語ではつくることはできないのであるが，英語などとは著しく異なる制約である．結局，(31)のように能動文で述べるのが自然なスペイン語の発話だということになる．[23]

(31) B (le) ha dicho a A que…

B$_{主}$ 彼$_{与(=A)}$ 言う$_{現完}$ A$_{与}$ ～ということを

B は A に～と言った(→A は～と B に言われた)

[23] ここで再帰受身を用いて，"Se me ha dicho que..."「～と私に対して言われた」のような文をつくる可能性もある。しかしながら，「～によって」と動作主句を伴うと非文となってしまうことは既述のとおりである．

(i) *Se me ha dicho por ellos que...

"se" 私$_{与}$ 言う$_{現完}$ 彼ら$_{動主}$ ～ということ

参考文献

De Miguel, Elena. 1992. *El Aspecto en la Sintaxis del Español; Perfectividad e Impersonalidad.* Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid.

Gili Gaya, Samuel. 1973. *Curso Superior de Sintaxis Española,* Bibliograf.

Takagaki,Toshihiro.2005. "On the productivity of the Spanish passive constructions". *Corpus-Based Approaches to Sentence Structures,* pp. 289-309. John Benjamins.

---------- 2009. "El dativo en la construcción doblemente pronominal con verbos intransitivos de movimiento: un estudio contrastivo del japonés y el español," *Fronteras de un Diccionario: Las Palabras en Movimiento.*(Eds. Elena de Miguel Aparicio et al.) , pp. 409-432, Cilengua. Fundación San Millán de la Cogolla, Spain.

Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy.* Cornell University Press.

興津憲作.1972.『中級イスパニヤ語文法』, 創元社.

金田一春彦.1950.「国語動詞の一分類」『言語研究』, 15 号,『日本語動詞のアスペクト』(1976 むぎ書房)所収.

高垣敏博. 2000.「<estar+過去分詞>と<テイル文>--結果相解釈をめぐって--」,『日本語と外国語との対照研究 VI, 日本語とスペイン語(3)』, pp. 67-93. 国立国語研究所, くろしお出版.

---------- 2004.「<estar＋過去分詞>構文」,『スペイン語学研究』20, pp.105-121,東京スペイン語学研究会.

---------- 2005.「<estar＋過去分詞>構文(2)」,『東京外国語大学論集』, 71 号, pp.23-41.

竹沢幸一. 1991.「受動文, 能格文, 分離不可能所有文と『ている』の解釈」,『日本語のヴォイスと他動詞』くろしお出版.

西川喬.1995.「受動態」, 山田(1995)「表現 14」, pp. 540-547.

福嶌教隆.1983.「イスパニヤ語における関心の与格を伴う自動詞文について(上)」,『神戸外大論叢』, 34 巻 2 号, pp.23-40.

---------- 1984.「イスパニヤ語における関心の与格を伴う自動詞文について(下)」,『神戸外大論叢』,35 巻 1 号,pp.75-98.

---------- 1990.「スペイン語と日本語—間接影響表現の対照」,『講座日本語と日本語教育第 12 巻言語学要説(下)』, pp.197-218.明治書院.

山田善郎他.1995.『中級スペイン文法』, 白水社.